教育旅行レポート　生の体験が主体的な学び育む

教育旅行は、楽しい思い出づくりにとどまらず、生徒にとって絶好の成長の機会でもある。自ら計画し、仲間と協力して行動する中で、責任感や判断力が育まれる。自主性をどう引き出すか―。今回は２校の実践事例を紹介する。

学校現場の実践例から

横浜市立岩井原中学校
滋賀・京都・大阪
25年6月2～4日

吉成夏生教諭

塚本聡教諭

横浜市立岩井原中学校（田副聡校長）は、地域住民とのつながりや生徒の自主性を重んじる教育に力を入れてきた。横浜市保土ケ谷区に位置し、周囲を閑静な住宅街に囲まれている土地柄もあり、生徒たちは積極的に地域の盆踊り大会や子ども食堂など町内開催のイベントにも参加している。

生徒の自主性を育む同校が修学旅行のメインとして選んだのは滋賀県東近江エリアでの民泊体験。「①校外での集団行動や班別の農家体験を通じて、社会性・協調性を身につけるとともに自ら行動できる積極的な姿勢を培う②さまざまな体験を通して関西の自然・文化・歴史を学ぶ」ことを修学旅行の目的に設定し、6月2日から4日にかけて実施した（参加生徒数は149人）。

泥に足を取られながらも丁寧に田植えを行った

事前学習は2年生時からスタート。京都について、自分だけのとっておきの情報をまとめた「Myるるぶ」の制作や生徒たちにとって未知のものだった万博について調べた内容をスライドにまとめた。当初は万博にあまり興味がひかれない様子の生徒たちだったが、万博の起こりや江戸時代末期から開催されている

竹細工作りに挑戦

ことを学ぶうちに万博訪問を待ちわびるようになったという。

「首尾一貫～今日もKyotoて万博（わらはく）に～」をスローガンに掲げた修学旅行は、京都観光、民泊体験、大阪・関西万博訪問を盛り込んだ今年ならではのプログラム。

1日目はクラスごとに分かれて京都の名所を訪れた。行き先はクラスで実施したアンケートをもとに決定。4クラスのうち、3クラスが嵐山、残り1クラスが伏見稲荷大社を選択した。第3学年の主任である塚本聡教諭は、京都観光の定番である伏見稲荷の鳥居を前に目を輝かせる生徒たちの様子が印象的だったと話す。

雨天でも楽しめる体験を用意してくれた

一方、嵐山では昼食も満足にとれないほどの混雑に見舞われ、事前学習で調べていたオーバーツーリズムの洗礼を受けたという。その後金閣寺、三十三間堂を見学し、夕方に受け入れ先に到着した。予定では2日目に農業体験を行うはずだったが、到着した時点で翌日の予報は雨。そこで、受け入れ先の多くの家庭が雨天ではできない体験を前倒しで提供してくれた。

ホストファミリーと食事作り

受け入れ先は、一般家庭にはじまり米農家、竹細工などの伝統工芸作家、牧場や民宿を経営している家庭など。多岐にわたる受け入れ先で、田植えや工芸品作りなど初めて尽くしの体験に熱心に取り組んだ。

夕食はそれぞれの家庭で協力して作った。自らで収穫した野菜や地物を使い、慣れない食事作りに奮闘した。道の駅で販売するジャム作りを手伝ったグループもあった。

団らんのあとは滋賀県のローカルゲーム「カロム」で楽しい夜を過ごした。シンプルながら熱中できる対戦を通して、ホストファミリーとの距離がいっそう縮まったようだ。

2日目はあいにくの雨だったが、ガリ版印刷やビニールハウスで種まき、水路や器を竹から作って流しそうめんを行うなど、各受け入れ先が屋内でもできる体験を工夫。生徒たちは雨でも充実した1日を過ごせたという。

最終日は大阪・関西万博を訪れ、班別で生徒たちが自身で予約したパビリオンなどを見学した。事前準備の段階で人気のパビリオンは落選することもあったが、予約のいらないパビリオンを調べるなど、臨機応変に万博を満喫している様子が見受けられたという。

最終日は大阪・関西万博を班別で見学

今回の修学旅行に際して、塚本教諭は「受け入れ先が家庭というプライベートな空間であることから、生徒たちとの相性が気がかりだった。生徒たちの性格や普段の様子を伝えられる範囲で窓口の近江日野交流ネットワークの担当者にお伝えしたところ、受け入れ先の家庭や体験活動の内容を照らし合わせて、一人一人にマッチする受け入れ先を模索してくれた。生徒と民泊先のミスマッチが起きることなく、子どもたちにとって充実した旅行にできた」と笑顔を見せた。

修学旅行を終え、生徒たちの様子に変化を感じているという吉成夏生教諭。「民泊先ではあいさつから丁寧に教えてくれたと生徒から聞いた。農業体験や食事作りを通して、今までの〝当たり前〟に深く感謝できるようになった」と生徒たちの成長をかみしめる。

生徒からも、充実した旅行の感想や手応え、ホストファミリーへの感謝の声が上がっており、事後学習の集大成として、10月に後輩へ向けてプレゼン発表を行うという。

田舎で〝非日常〟な民泊体験
心温まる交流から新たな気付き

愛知県東浦町立東浦中学校
関西方面
25年6月24～26日

篠嵜瞬教諭

愛知県知多郡東浦町は、知多半島の付け根に位置し、都市部に近いながらも緑豊かなベッドタウンだ。同町の中心部にある東浦中学校（二村圭史校長）は、全校26クラスの大規模校。日本国籍以外の生徒が5%ほど在籍しており、生徒たちは普段から、文化や背景の違いを肌で感じ、互いに尊重し合いながら生活している。

「当校の一番の特徴は、生徒の自主性を重んじる点」と話すのは、第3学年を担当する篠嵜瞬教諭。日ごろから、生徒が自ら考え、実行する場面を重視しているという。

同校では例年、東京ディズニーリゾートなどでの研修を含む、関東方面での修学旅行を実施してきた。だが今年度は、大阪・関西万博が開催されることから、万博会場での研修を盛り込んだ関西方面での修学旅行の実施を決めた。万博で、世界各国のSDGsについて学習ができることや、バス移動のため6月末の比較的空いている時期に旅行ができ、クラス別研修の候補地を幅広く設定できることなどが主な理由だ。

旅程は、1日目昼～夜にユニバーサルスタジオジャパンで班別研修を実施。2日目の午前中に万博研修、午後にSDGs本、大阪の企業の取り組みを主体的に学ぶことも目的に掲げた。事前学習などを含め、一番注力したのは、今回初めて生徒たちが自ら訪問先を決め、アポイントメントも取る、企業訪問研修だ。

BABY　JOB社への企業訪問では、妊婦体験システムを体験

エクセル東急大阪では、総支配人らからバリアフリー対応などを聞き取りした

クラス別分散研修での座禅体験（上）や忍者体験

自ら企業選び、アポ取りまで
主体性が学ぶ楽しさ引き出す

企業訪問研修のテーマであるSDGsについては、2年生の4月から学習を始めた。17項目を各クラス2、3項目ずつ担当して調べ学習を行い、9月に学年で発表。その後各自が興味を持つSDGsの項目と詳細な内容ごとにグループ分けを実施。冬休みには、各自のテーマに沿って、SDGsに関連する在阪企業調べを課題とした。

1月には類似テーマを持つ生徒同士でSDGs班47班を決定。班テーマ、個人テーマを設定するとともに、テーマに沿った訪問先企業を班ごとに選び、ホームページや電話で生徒たち自身がアポイントメントを取った。

「いたずらと思われたり、5社連続で断られる班が出たり、生徒たちは大変苦労したが、どの企業にも丁寧に対応していただいた」と篠嵜教諭。

最終的に、大手企業から地元中小企業まで35社に分かれて企業訪問研修を行った。

万博研修の後、生徒たちはそれぞれのアポイントメント先に向かった。訪問場所を間違えるアクシデントなども一部あったというが、全ての班が無事に企業を訪問。各担当者から、事前に送付した質問に回答してもらったり、提供しているサービスや製品に実際触れさせてもらったりした。

大阪・関西万博では「未来の都市体験」パビリオンを訪問

旅行終了後には、訪問企業に対し、生徒が企業訪問で学んだことや感じたことをまとめて送付した。生徒たちからは「環境にやさしい製品づくりの難しさを学ぶことができた」「障がい者への接し方など新しく学ぶことができた」など、テーマに関する感想に加え、「人生で初めてオフィスを見学した」「社員の方同士の仲の良さがあふれるやりとりに緊張がほぐれた」など、仕事の現場や働き手についての感想も多数挙がった。

例年とは異なる、万博やUSJへの旅行ということで、当初生徒からは不安や不満の声もあったという。だが終了してみると、企業訪問研修の楽しさや充実感を語る生徒もいたそう。行き先選定理由であった万博研修は、短時間だったことや、訪問パビリオンが事前に決まっていたことなどもあり、あまり生徒の印象に残らなかったようだ。

篠嵜教諭は「万博のパビリオン見学もだが、大人が行き先を決めて『行かされた』だけでは何もならないということではないか。普段発表などしていない生徒からも『SDGsの発表が楽しみだ』との声が聞かれている。教員の負担は大きかったが、生徒自身が主体的に関わったからこそ実現した、『学びになる楽しい思い出』が得られたのが良かった」と手応えを語った。

同校では来年以降、再び関東方面での修学旅行に戻す予定。東京の企業などのSDGsに関する取り組みを学んだ後、東浦町でできるSDGs活動案の提案などにつなげる考えだ。